

巡礼をめぐる理解と誤解

Understanding and Misunderstanding on the
Term of "Junrei (Pilgrimage)"

中山和久

- ①概念をめぐる諸問題
- ②巡礼研究の成果、または巡礼の理解
- ③巡礼の多様性、または巡礼をめぐる誤解
- ④「巡礼」研究の課題

【論文要旨】

概念の問題は常に気になるものである。「定義」の確立という言葉の魔力に容易に屈服させられるほど気が弱くは無いが、無視して論を進めるほど気が強くも無い。

本稿は往々にして厄介な概念の問題を、「巡礼」という語を事例として、巡礼研究の文脈において見て行くものである。考察の対象は、研究者による巡礼理解にとどまらず、日本で広く用いられている用語における巡礼理解をも含めたものである。すなわち、まず、研究の動向を時系列に従って押さえつつテクニカルターム（分析概念）としての「巡礼」を考え、次いで、用語としての「巡礼」と巡礼的行為を視野に取めつつフォークターム（民俗語彙）としての「巡礼」を扱うものである。特に後者においては、民俗的事実が有する研究者の思惟を超える底力に委ねて、「巡礼」の周辺から立ち上がる巡礼の多様性を数点の図とともに提示する。

また、「巡礼」に関しては翻訳語との関係で困難な状況が生じ易いのであるが、pilgrimageとの比較研究を進めるためにも、これに関して整理を試みるものである。

最終的には、こうした問題意識にかなう、有効な「巡礼」概念の定立が求められるため、本稿でも一応の概念規定を提示するが、しかし、多様な巡礼の在り方が示しているのは、担い手の外形上の表出と内面との関係にこそ重要な問題が潜んでいるということである。それは人々の心に映ずる「歴誌」の問題であり、巡礼の意味の問題である。こうした「歴誌」生成過程の中にこそ、現代科学では超えられない癒しや救い、生きがい、心の処し方といったものを実現する豊かな民衆の知恵が秘められていると考えられるのである。

キーワード：概念、用語、翻訳、巡礼、多様性